

## 息子に受け継がれた「学ぶこと」への情熱

2023年、世界各地で次々と衝突や戦火が広がっています。さぼうと21の監事を務めてくださっている東川 レバンさんは、34年前、インドシナ難民として来日し、当会の姉妹団体「難民を助ける会」の難民救援奨学金制度（現 生活支援プログラム p.2参照）により進学しました。戦争によって激変した人生を前向きに歩んでこられた東川さんに、今改めて、ベトナム脱出前後から現在に至るまでのお話を伺いました。

（インタビューア－：難民を助ける会 太田 阿利佐）

私が小さな舟でベトナムを脱出し、シンガポールの難民キャンプを経て日本にやってきたのは1989年、26歳の時でした。「難民を助ける会」（国内活動はさぼうと21に引き継がれる）や大学・大学院の恩師、就職先の上司ら様々な方々との出会いを経て、今日、IT 関係の会社を経営しています。この7月、長男のレオンが国際物理オリンピックで銀賞を受賞しました。本人の努力はもちろんですが、私の父が私の中に育ててくれた「学ぶことへの情熱」を受け継いでくれたようで、大変うれしく思っています。思えばその情熱が、私を日本に連れてきたのでした。

私はベトナム中部のフエ市で生まれ育ちました。父は南ベトナム時代には南政府の諜報局で仕事をしていました。アメリカのCIA とも関係があったようです。そのためベトナム戦争が終わった3年後ぐらいから9年間、刑務所に入っていました。生活も大変でしたが、ベトナムではそのような人物が家族にいと、それだけで平等に扱ってもらえません。例えば私はフエ市総合大学数学科の入学試験で3位の成績を取りました。翌年のダナン工科大学の入学試験では首席でした。ベトナムでは大学入試の成績が公開されるのです。しかしいずれも入学許可は下りませんでした。

地区の公安委員会が「社会に貢献している」と認めてくれないと、入学が許可されないのです。私の場合、父の経歴が問題になっているのは明らかでした。

そんな時、中学・高校時代の私を知る先生方が「彼に勉強させないのは惜しい」と、応援してくれました。3年目に受験したサイゴン（現ホーチミン）の工科大学で、先生が交渉して、教育委員会が公安委員会に私の書類を回さずに、直接に大学に送っていて、大学へ入学させてくれたのです。しかし、2年ほどでばれて退学になりました。大学の担任の先生は私に大学で勉強を続けさせたいと、先生全員に頼み込み、私はこっそり授業に出席させてもらいました。しかしもちろん卒業はできませんし、就職の見込みもありません。半年ほどであきらめ、兄と工場をつくりました。



当時、川で砂金を探ることが流行していました。兄と私は、ベトナム戦争後あちこちに放置されていた装甲車や戦車などの鉄くずを材料に、金塊を延ばす機械を作りました。それは飛ぶように売れ、私たちは大儲けしたのです。

それでも私は「自分の人生はこれでいいのか。もっと勉強したい」と思っていました。幼いころ、刑務所に父をたずねて、2人きりになった時「この国にお前の未来はない。できるなら外国に行け」と言われていました。父は決して「勉強しろ」とは言わなかった。けれども子どもたちの教育をととても大事に考えており、その気持ちを私はずっと感じていました。だから国を出ることにしたのです。

何人か仲間と一緒に出資して脱出するための漁船を作りました。若いから馬鹿でしたね。300リットルほどの水を積んで、幅3メートル、長さ11メートルほどの小舟に38人も乗って、シンガポールを目指しました。そんな小さな舟でシンガポールまでいけるわけではないとその後に分かりました。途中で、大きな船が拾ってくれればいいのですが、1980年代終わりにはどの国の船もなかなか拾ってくれないようになっていました。

見渡す限り、海、海、海。怖いほど、水しかない。船出して3日目、タイの漁船に出会いました。私たちに水をくれ、「この船でシンガポールに行くのは無理だ。ここから200キロのところに商船が行き交う航路がある。そこへ行け」と言うのです。いちかばちか航路を変えました。そうしたら本当に商船がたくさん行き交っているところに出ました。そのうち6隻が私たちの周りをぐるぐる回り始め、やがてイギリスの船1隻だけが残し、私たちを拾ってくれました。その3時間後、ものすごい暴風雨がやってきました。私たちを取り巻いた商船は、台風が来るのを知っていて、だれが私たちを助けるか、相談していたらしいのです。あのまま小舟に乗っていたら、私たちは間違いなく海の底に沈んでいました。

シンガポールの難民キャンプには半年ほど滞在しました。私は本当はアメリカに行きたかったのです。日本語はとても難しいと聞いていましたし、アメリカは父と縁がある国でしたから。しかし、アメリカの係員は「父親が刑務所にいたあなたが、ベトナムの大学に入学できるはずがない。あなたは嘘つきだ」と言うのです。父はアメリカ政府の協力者として、過去の「組織コード」を持っていました。私は当時、コードについては知りませんでした。もし知っていたら、アメリカに移住できていたと思います。

難民として日本に来たのは1989年、私は26歳になっていました。工場での仕事は一日十数時間にも及び、疲れてとても勉強どころではありません。そんな時、友人から「難民を助ける会」を教えてください、当時事務局長だった柳瀬房子さんの紹介であるお寺に寄宿させていただきました。朝5時に起きて掃除するなどお寺ならではの毎日でしたが、落ち着いて勉強でき、来日1年半ほどで東京農工大学数学科に入学することができました。大学院に入ってから、研究者として給料をもらうことができ、生活も楽になりました。

思えば日本に来てからもう34年。当時と比べると、日本は外国人にとってずいぶん住みやすくなったと思います。日本はもう事実上の移民大国。やるべきことは明らかです、多くの民間団体も活動しています。日本に出稼ぎに来る人たちはまじめで勤勉な人が多い。仕事と生活環境さえ整えば、たくさん税金を払ってくれます。ちなみに私もかなり税金を納めています（笑）。

息子も娘も、学校生活や学問を楽しんでいるようです。親としてはそれがうれしいですね。今私はさぼうと21の監事をしています。いつか会社を退いたら、さぼうと21で外国人の子どもたちの中学・高校受験をサポートするボランティアをできたらいいなと思っています。数学にはちょっと自信があります（笑）。

## 2024年度 生活支援プログラム 支援生募集

日本に定住し、大学や専門学校の学費の負担が経済的に困難な難民、日系定住者（南米など）、中国帰国者の子など、原則として定住・永住の在留資格を持つ方に、返済不要の「生活支援金」を支給します。

|         |                                |
|---------|--------------------------------|
| 対 象     | 日本の大学、専門学校に在籍中 または来年4月に入学予定の方  |
| 支援期間・金額 | 2024年4月～2025年3月 年額24万円         |
| 募 集 期 間 | 2023年12月1日（金）～2024年1月31日（水） 必着 |



詳細はホームページをご覧ください。 <https://support21.or.jp>

## 坪井一郎・仁子 学生支援プログラム（通称：坪井基金）支援生報告会をJICA東京で開催

当プログラムは、東洋熱工業株式会社の創業者 故 坪井一郎様・仁子様ご夫妻のご遺贈を元に2005年に開始し、大学（3年次以上）・大学院で学ぶ難民等の外国出身者を支援しています。今年度は11月23日（木・祝）に、JICA 東京（東京都渋谷区）で支援生報告会を開催しました。支援生が決めた発表タイトルは「十人十色の価値創造」。大学4年生と大学院生（合計9名）が2チームに分かれてグループ発表を行い、ルーツや専攻分野について述べた後、それぞれの「ライフプラン」を語り合いました。

今年度は来春卒業または進学予定の支援生が多く、人生の節目を迎えてこれまでを振り返り、「外国にルーツをもつ」ことによって経験した悩みや、ルーツをプラスに捉えた点、進路選択時の家庭状況、教育に対する家族の想いなどを共有しました。さらに、卒業後の目標や、人生において大切にしたいことなど、家族を含めた自らの将来像についても生き生きと語ってくれました。その後の交流タイムでは、発表者も来場者の方々と一緒にテーブルを囲んで座り、打ち解けた雰囲気の中で質疑応答が行われました。



少人数で会話を楽しんだ交流タイム



## 夏期研修会のご報告 @オリンピックセンター

8月26日（土）に国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）で支援生の夏期研修会を実施しました。生活支援生・坪井基金の支援生など多様なルーツをもつ約25名が参加し、「ソーシャルビジネス」をテーマに、参加型の研修を行いました。

午前中はソーシャルビジネスとは？ということから始まり、講師お二人の体験談をお聞きして質疑応答。午後はSDGsの中から解決したい社会課題を選んで小グループに分かれ、ビジネスモデルを立案して発表しました。3月に卒業した元支援生も加わり、医療通訳サービスや外国人の人材派遣、企業研修の提供など、外国にルーツをもつ支援生ならではの視点・経験を生かしたソーシャルビジネスのプレゼン大会となりました。

**午前の部** 『社会とあなたをつなぐもの～ソーシャルビジネスのリアル～』 講師：八木橋 昌也 さん、村上 春二 さん

**午後の部** 『ソーシャルビジネス プレゼン大会』 講師：山田 諭 さん

### 参加者アンケートより（抜粋）

- 難しいと思っていた「ソーシャルビジネス」が実は身の回りを少しでも良くすることの延長線上にあると知り、見方や考え方が大きく変わりました。就職を控えた今、この機会に社会と自分のつながりを再確認できました。
- 私たちの世代が、次の世代のために何を改善すべきかを考えることを学びました。
- ソーシャルビジネスについて初めて知り、自分が考える就職の幅が広がりました。また、先輩方に進路のことを聞くこともできて良かったです。
- 単に「社会に貢献する」だけではなく、それをビジネスとして利益を出し、持続可能な事業にするという考え方を知ることができ、有意義な時間を過ごすことができました。



## 難民等への日本語教育 ～仕組みを模索し、人材を育成する～

日本政府が認定した条約難民の数が急増しています。タリバン侵攻により退避を余儀なくされたアフガニスタン出身者がその大半を占め、その多くは家族で退避しています。

そうした状況を鑑み、さぼうと21では、従来の対面教室に加え、新たに栃木県の小山市、宇都宮市でも対面の学習支援を開始しました。

通常のオンラインでの個別学習支援も毎日開催を続ける一方で、2022年2月にはロヒンギャ難民二世の小中学生対象の「オンライン上の学校」（現在約60名参加）を開始しましたが、2023年6月、さらにアフガン難民二世の小中学生を対象とした「オンライン上の学校」（現在約20名参加）もスタートしています。

仕組みづくりだけでなく、関わる人材の育成も急務ととらえ、今年度は、当団体がこれまで蓄えてきた難民へ

の日本語教育の知見を活かし、「難民等に対する日本語教師【初任】研修」（文化庁「日本語教育人材の研修プログラム普及事業」受託）を実施しています。現在第2期を実施中ですが、第1期の研修修了者からは、心にしみる感想や決意が届けられています。

「難民の方は、ご本人が望んだことではないとしても、事実として今、日本にいて、縁があって出会うことができる。それは、不思議なことであるとともに、なんて楽しいことだろう。人と人がつながることの純粋な喜びやそこから生まれるエネルギーを大事にして、私は今後も日本語教師として生きていきたい。」



## アフガニスタン退避者の 「学び」「食」「暮らし」を支援しています

昨年度、さぼうと21はAAR Japan（認定NPO法人 難民を助ける会）と協働で、アフガニスタンやウクライナから日本に避難してきた方々への緊急支援活動を実施いたしました。

今年度も引き続き、主に教育の側面から支援を続けています。そんな中、学校法人ISI学園（東京都豊島区東池袋 荻野 正昭理事長）から無償での学習者受け入れのお申し出をいただき、現在アフガニスタンからの退避者9名が日本語学校への通学を開始しました。さぼうと21は彼らの学習が継続するよう、交通費支援を行いながら、学生や学校への伴走支援を行っています。

彼らの多くは10代～20代前半の若者です。受け入れ可能な学校が限られているため自宅からの通学時間が長く、毎日仕事と言語学習を両立させるのは、大変困難な状況です。それでも、皆、大学・専門学校等への進学を目指して、熱心に学習を続けています。

日本に来てはじめて「自分が属する場所＝学校」を得たことにより、彼らの日本語力は日に日に向上しており、その生き生きとした表情がとても印象的に映ります。

また、昨年末の越冬支援「暖（だん）を届けるプロジェクト」に続いて、今年もお米等の支援物資の配布を行っています。支援者の方とスタッフがレンタカーを使って、千葉、埼玉、栃木などに住むご家族のもとに物資を直接お届けしています。

「物資をもらうこともうれしいが、それ以上に、私たちのために一生懸命配りに来てくれることがもっとうれしい」というお言葉に励まされ、できる限り退避者の方々と直接お目にかかり、やり取りの中から今何が必要とされているのか、今わたしたちには何ができるかを考え、支援の活動を続けてまいります。

緊急支援の詳細は随時、ホームページでもご報告してまいります。



お米の提供をいただいた反町慶治郎様・加代様

## アフガン学生の日本語学校通学の 交通費支援を助けてください！

<https://support21.or.jp/news/2023/11/27006/>

彼らの学びをこれからも継続できるよう、皆様のお力が必要です。温かいご支援をお願いいたします。

## ニュースレター発行遅延のお詫び

この74号が今年度最初の発行となります。活動のご報告が大変遅くなり、深くお詫び申し上げます。今後も引き続きご支援いただければありがたく存じます。



# Newsletter

Support21 Social Welfare Foundation

Vol.74 2023.12

社会福祉法人 さぼうと21

理事長 高橋 敬子

## 社会福祉法人さぼうと21は…

認定NPO法人難民を助ける会（AAR Japan）を母体に、その国内事業を受け継ぎ、社会福祉法人として1992年に設立されました。

日本で生活する難民やその家族、定住外国人などの相談に乗り、学業継続のための就学支援や学習支援など、自立を後押しする活動を行っております。

## 私たちの活動を応援してくださる方を 求めています！

■会 員：法人会費50,000円／個人会費5,000円

■ご寄付：随時受付

■マンスリーサポーター：随時受付

詳しくはこちら➡



会費・ご寄付とも税法上の優遇措置が受けられます

## ◆会費・寄付のご送金口座◆

|         |                                                                   |
|---------|-------------------------------------------------------------------|
| ゆうちょ銀行  | 振替口座：00180-7-25470<br>加入者名：社会福祉法人 さぼうと21<br>※通信欄に会費または寄付とご明記ください  |
| 三井住友銀行  | 目黒支店(普) 851872<br>名義：社会福祉法人 さぼうとにじゅういち                            |
| みずほ銀行   | 目黒支店(普) 1180279<br>名義：社会福祉法人 さぼうとにじゅういち                           |
| 三菱UFJ銀行 | 目黒駅前支店(普) 1390060<br>名義：社会福祉法人 さぼうとにじゅういち<br>※銀行振込み後は事務局までご一報ください |

## お問い合わせ

## 社会福祉法人 さぼうと21

住所：

〒141-0021  
東京都品川区上大崎2-12-2ミズホビル6階

TEL：

03-5449-1331

FAX：

03-5449-1332

E-mail：

info@support21.or.jp

URL：

http://www.support21.or.jp

